年報筑波社会学　第14号（2002），136～141頁.

《書評》

町村 敬志 著『越境者たちのロスアンジェルス』

平凡社，1999年，286頁，2500円.

倉　真一

『越境者たちのロスアンジェルス』を評するにあたって、まず著者の思考の根底にある問いから考えてみたい。まず本文中で何度も表明される「違和感」に注目したいと思う。「けれど、どうも腑に落ちない」（16頁）、「だが、どうもちがう。しっくりこない」（55頁）といった形で示されている「違和感」は何に対して向けられているのだろうか。大きく分けて二つの立場に集約できる。

ひとつはロスアンジェルスを「多人種・多民族」や「エスニシティ」といったキーワードを通してみようとする立場である。著者自身も当初は「エスニック・ロスアンジェルス」の苦悩と現実といったスタイルの作品を考えていたという（「あとがき」）。しかし人種・民族構成の多様性や複雑性が問題なのではなく、むしろアメリカ社会において「エスニシティ」というカテゴリーが人々を支配的社会に「回収」する仕掛けとして機能していることに問題をみる、という認識の転回を経て、その「仕掛け」自体を問い直し、エスニシティを通じて自他や社会を見る「心の習慣」を人々の間に浸透させる「力の場」としての都市が探究の対象として据え直される。

ふたつめはポストモダンの都市論が語るロスアンジェルス像に向けられる違和感である。「ロスアンジェルス在住の研究者」が「二一世紀の実験都市」「ポストモダン都市」といった形でその特殊性や特異性を強調するロスアンジェルスは、しかし「外部の人間（よそもの）」である著者からみれば、20世紀という時間が厚みをもって刻み込まれた都市であり、むしろ「二〇世紀を代表する都市」、「戦争と民族と大衆文化」に彩られた「二〇世紀を象徴する都市」である。だから著者は以下のような形で問いをたてることになる。「二〇世紀という時代は、『都市』の名前のもとに、いったいどのような社会をその世紀末に向か

って作り上げてしまったのだろうか」(56頁) と…。

さらに本書のキーワードといってよい「越境者」という人間類型もまた、ロスアンジェルスという都市の持つ「冷たさ」=「違和感」を端緒として把握されていく。自分を暖かく包容してくれる「居場所」がないと感じながらも、そこに開放性や自由といった魅力－「居場所」を見出す人々。ジンメルが「異郷人」を定義する際に与えたものと同じく、本書の主人公である「越境者」たちもまた、「何かではない」(差異性) ことによって「何かである」(同一性) 存在としてパラドキシカルに定義される。と同時に、「差異性」を受け入れることによって「同一性」を確保するという都市像とも「越境者」は重ね合わされているようだ。

よって本書の第一のテーマは、多くを (「居場所」もそのひとつ) 剥奪された「弱い」存在でありながら、だからこそ何でも利用して生き残ってしまう「強さ」－この「越境者」に共通する「生きざま」を描くこととされる (20頁)。だが居場所がなく「何でもない」という越境者の存在様式は、同時に居場所を求めようとする強烈なアイデンティティ願望と表裏一体の関係にある。この「何かでありたい」の「何か」に内実を与えるうえで、先に述べた「仕掛け」=「エスニシティという罠」がかかわってくる。そこで本書第二のテーマとして、「越境者」と「エスニシティ」という二つのアイデンティティのあいだで揺れる人々の意識と戦略を、ロスアンジェルスという都市の歴史と重ねつつ描くことが掲げられる (27頁)。これは「エスニシティ」と「エスニシティ」のあいだだけでなく、「越境者」と「エスニシティ」のあいだにも緊張や対立をみる著者独自の視点に他ならない。

ここからは章構成および内容を簡単に確認しながら、各章を通じて評者が特に興味深く読んだ部分を中心に話を進めていきたいと思う。

まず第1章においては、ロスアンジェルスの都市構造上の特徴として、①「西洋の果て」「国境の北」「東洋のから入口」という表現に象徴される境界的な地政学的位置づけ。②「中心のない」都市構造であること。ゆえに中心場も非－中心場も欠いた都市は、同心円構造を持たないまま自己増殖を遂げていったこと。③産業経済上の特徴として二〇世紀の新興産業群 (石油産業、映画産

業、軍用航空機産業）が都市の急速な成長を支えたこと。このいわば「成り上がり」都市を支える諸産業の若さゆえに、ロスアンジェルスにおいてはドラスティックな変化が短期間に容赦なく生じたこと、の三点が示される。

ロスアンジェルスという「舞台」を以上のように把握したうえで、この「舞台」が出会った越境者のなかで著者が描くのは、一九四〇年代のヨーロッパからの亡命者、ともに「有色」の越境者であったアフリカ系と日系のアメリカ人、数のうえではもはや「多数派」となったラテン・アメリカ系の人々、グローバル化時代の新しい越境者としての日系企業駐在員とその家族である。

第２章では、「とらわれのない自由人」といった亡命知識人イメージや普遍性のある種の体現としての亡命者文化といった、亡命者と他の越境者との違いを強調しがちな見方に対して、著者はむしろ亡命生活の下部構造－亡命者たちが「とらわれている」構造をとおして越境者としての共通の「構え」を見つけ出していこうとする。

ロスアンジェルスに流れついた亡命者たちもまた、アメリカ社会そしてロスアンジェルスという都市で強烈な違和感＝居場所のなさに悩まされる。しかしどれほど違和感を抱こうとも、彼らはアメリカ社会に「順応」していく。そればかりでなく「生きるためには何でもする」という越境者に共通した戦略を通じても「順応」は進んでいく。だが亡命者たちの順応には限界が存在した。それは彼らが「帰るべき場所」をもった「ゆきずりの」亡命者であったことと、「順応を期待されない」、「希少性ゆえに異国において尊重される」という亡命者に割り振られた微妙で不安定な地位に由来する。

著者には越境者とその生きざまを描く際の、独特の視点や技法といったものがあるように思われる。ひとつは越境者の多様性を語ろうとするよりも、越境者に共通した「構え」あるいは意識や戦略といったものを描き出そうとしている点である。ふたつめは様々なかたちのデータを都市空間のうえ（具体的には地図上）に積み重ねていく技法である。例えば第２章において、亡命者たちの住居の分布が地図によって示され、ついで亡命者たちの日記や作業日誌による交友圏のデータがそこに重ねられ、さらに亡命者たちの住居の写真によって亡命者たちのあいだの階層差がさらに地図のうえに重ねられていく。ここではと

りあえず「積み重ねの技法」とでも呼んでおくが、この技法により「力の場」としての都市と越境者の生きざまが同時に浮き彫りにされていく過程は職人芸的であり、スリリングかつ面白い。これらの視点や技法は、以下の各章においても一貫した形で展開されていく。

第3・4章では、亡命者たちと違って帰るべき故郷もなく、「冷たい都市」ロスアンジェルスを新しい故郷としていく越境者たちが取り上げられる。第3章は、アフリカ系と日系のアメリカ人の出会いのプロセスに焦点をあてつつ、支配的な白人社会を生き抜く「有色」の越境者たちに共通する生き残り戦略が見出される。しかし戦略のこの共通性ゆえに、両者はしばしば同じ資源や空間をめぐって競争と対立を引き起こすことになった。ここでアフリカ系アメリカ人と日系アメリカ人の軌跡が交錯する場所が都市の中にいくつも現れ、そのような場所には、互いに対立もし共鳴もしあう複数の記憶が重層化していく。

第4章では、ロスアンジェルスのスペイン語ラジオの隆盛と戦略をとおして、ヒスパニックの人々が強調する「数を力」にするという戦略の持つ逆説が浮き彫りにされる。ほんらい少数派の運動が持っていた質的な違いに正統性をおいた試みが、量的な戦略へと翻訳され運動そのものが変質してしまう時、このような量的に「多数派」であることに基盤をおいた戦略は、かえって従来からの「多数派」である白人層からの数による反撃を呼び、「提案１８７」をはじめとする一連のヒスパニック系を主な標的にした排除政策が住民投票を通過するという事態をもたらすことになった。

第5章で取り上げられる越境者は、グローバル化時代の先端に位置する日系企業駐在員とその家族である。企業駐在員たちは「帰るべき場所」＝「日本」をもっている。しかも彼らは経済的には非常に恵まれた移住者で、しかも移住が会社の命令によるだけに、「面白み」に欠けた「往生際の悪い」越境者だと著者はいう。しかしここでも著者は越境者に共通する運命から彼らも自由でありえないと強調する。なかでも興味深かったのは、「日本」を現地において「再現」する試みが、変形した「日本」を無数に産み出しつつ、エスニックな境界が常に揺らいでいる現場、特に現地校という教育の場における現実である。現地校が「日本性の保持」を第一の目的としているにもかかわらず、日本性の核心に

あるとみられる日本語の教育そのものを通じて子弟たちの「日系」アメリカ人化＝エスニック化がすすんでしまうという逆説である。

「おわりに」において、著者はあらためてアメリカ社会がどのような人も夢を自由に追求できる開かれた平等性をもつと同時に、どのような人であろうと「エスニシティ」という仕掛け＝「巨大なひき臼」で引いていく「非情さ」においても平等であることに、越境者の自由と苦難の源泉を見出している。そして「差異性」を受け入れることによって「同一性」を確保する都市ロスアンジェルスのダイナミズムも、「同一性」を確保するために「差異性」を排除するかのような現実を前に逆回転を始めてしまったかのようである。

しかしこれは「越境者たちのロスアンジェルス」－「冷たい都市」の敗北では決してないという。二〇世紀都市は「冷たさ」にもとづいた社会－空間編成に対して、共同性の復興を通じて社会の再統合を夢見てきた。著者が何度も言及した「エスニシティ」というカテゴリーを通じて人々を社会に「回収」していく仕掛けも、多文化主義の試みも基本的にはこの夢の延長線上にあるように評者にはみえるが、だとしたら20世紀都市の夢の、エスニシティというカテゴリー化の、多文化主義の、そして「エスニック・ロスアンジェルス」の挫折とは言えても、「越境者たちのロスアンジェルス」の挫折ではないというのが、おそらく著者の主張であろう。

だからこそ「冷たい都市」を出発点にして、都市に感じる「違和感」に「共感」しつつ、自身もそのひとりである「越境者」の生きざまに共鳴しながら、著者は共同性や信頼といったものに飛びつかず、目的や歴史の共有でない「不確実性」の共有によってつなぎ止められることに、都市の可能性を感じている——熱望でも夢としてでもなく、あくまで冷静かつ確かな覚醒として——ように評者には思われた。

書評を終えるにあたって、著者町村の職人芸がひかる魅力なこの作品に触発された読者のひとりとして、二点ほど簡単にコメントしておきたい。

まず第一に本書の内容は学術書のそれに相当するが、文体や表現は一般向けに書かれているために、例えば「仕掛け」や「構え」といった平易な表現が多

用されている。評者はそれらを前後の文脈や脚注や引用から、「仕掛け」を文化装置orイデオロギー装置、「構え」をハビトウスといった形で専門用語に翻訳しながら読み、特に問題もなかったのだが、ただ一つ「力の場」という表現については、あまり自信をもって「翻訳」できなかった。本文中では明確に定義されていないこともあって、とりあえずブルデューの「場（界）」の概念に近いものとして読み進めたのであるが、どうなのであろうか。

第二に、第4章で著者は「ヒスパニック」という集団カテゴリーも人々の営みを通じて日々社会的に再生産されていくが、その由来を忘却されたまま、人々の行為や意識の新しい文脈になっていく点では「神話」にすぎない、という（204頁）。「数を力」にする戦略とは、このような「ヒスパニック」という言葉の持つ神話作用が十分に働くことによって、はじめてリアリティを獲得できる。この意味で「ヒスパニック」が言葉として持つ神話作用は、明らかに「数を力に」するマイノリティの戦略と従来の「多数派」による数の反撃双方の前提をなしている。

しかしそれだけであろうか。評者がみるところエスニックなカテゴリー化も問題であるが、それに加えて自他のエスニック集団を「多数派」（マジョリティ）－「少数派」（マイノリティ）の軸に位置づけようとする「心の習慣」こそ問題なのではないか。しかも本来「マジョリティ（majority）」と「マイノリティ（minority）」とは、数の多少のみを意味する言葉ではない（例：ベースボールの大リーグはmajorだが、人数だけ問題にすれば全くの「少数派」のはずである）。むしろ様々な社会的資源（地位や名声、収入・財産、発言権や権力、学歴、コネなど）にアクセスできる機会の多少と捉えたほうが、まだ社会学的には理解しやすい。にもかかわらず「マジョリティ－マイノリティ」が単なる「多数派－少数派」という数の次元に単純化されてしまう「仕掛け」もまた考察の対象とできれば、第4章の結論部分はいっそう明確になったと思う。

（くら　しんいち／宮崎公立大学）